

■ 第93回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る 2025 年 11 月 9 日（日）、TKP 博多口カンファレンスセンターとオンライン会議システム Zoom のハイブリッドにて、第 93 回調査研究方法検討会が開催されました。

検討会の報告要旨は、各演者の方へお願いしております。ご発表いただいた研究の概要とともに、検討会で議論された内容も含めご報告いたします。

「学校検診における側弯症スクリーニングにおける着衣下スコリオメータ使用法の検証」

橋本裕美

1 年前の第 90 回調査研究方法検討会で、調査方法について相談させていただいた、着衣下でスコリオメータを用いて学校検診の側弯症のスクリーニングを行う研究を、今年度茨木市の全小中学校で実施した。今回はこの調査の結果を報告し、データの解析方法に関して相談させていただいた。

スコリオメータの使用により側弯症の検出率が上がり、有益であった。保護者の事前の側弯チェックのアンケートの回答と、二次検査での側弯の程度との相関は見られなかった。精査勧告を行っても受診をしない家庭が多いことも明らかとなった。検討会において、スコリオメータの角度と二次検査結果との関係を見ることなど有益なアドバイスを頂いた。

「乳幼児期の食事内容と食行動に関する観察研究」

江田明日香

国内において、離乳期の食事内容や食行動に関する先行研究は数少ない。今回私は、表題の研究計画について初めて相談させていただいた。リサーチクエスションは、「離乳期の児が手づかみ食品を開始した時期によって、乳児期に触れる食品の多様性が変化し、幼児期の食事内容や食行動に影響を与えるかどうか」である。具体的には、生後 6～18 か月の健康な乳幼児の保護者を対象としたアンケートを実施し、どの時期に手づかみ食べを始めたのか、月齢ごとに摂取した食品や硬さ、食事の困難さなどを質問し、結果をまとめる計画である。離乳食に関する調査は交絡因子が多いため統計処理が困難あることや、可能であれば前向き調査が望ましいなど、多数のご意見をいただいた。これらの課題を踏まえ、調査実施に向けて準備を進める予定である。

【背景】マイコプラズマ感染症は、2024 年に約 8 年ぶりに大規模な流行が認められ、2025 年においても流行が継続している。マクロライド耐性株の増加が临床上の大きな問題となっているが、耐性遺伝子変異の有無を迅速に検出可能な診断法が開発されており、治療方針の選択や臨床転帰にどのような影響を与えているかについて検討した報告は十分ではない。

【目的】当院における 2024-2025 年シーズンのマイコプラズマ感染症症例を後方視的に解析し、診断時にマクロライド耐性遺伝子変異の有無が判明しているかどうかによって、臨床経過（発熱期間、治療薬変更、入院率など）がどのように変わるかを明らかにすること。

【方法】研究デザインは、単施設の後方視的観察研究。本研究の対象は、当院において 2024 年 1 月 1 日～2025 年 12 月 31 日にマイコプラズマ感染症と病原体診断されたすべての患者とする（想定症例数約 150 例）。臨床経過の追跡が不十分な症例は除外とする。

病原体診断は以下の 3 種類の核酸増幅法を用いて行う：①スマートジーン（マクロライド耐性遺伝子変異の検出が可能）、②Multiplex PCR 法を用いる Spotfire、③外部委託による LAMP 法。検査法の選択は原則としてスマートジーンを用いたが、一時的な試薬供給不足により LAMP 法を選択した症例、および他の病原体の関与が疑われた症例には Spotfire を使用した。

電子カルテを用いて以下の項目を後方視的に収集する。

患者背景：年齢、性別、基礎疾患の有無

臨床経過：発熱パターン、咳嗽の性状、咽頭痛・頭痛・鼻汁・ラ音聴取の有無、初診時病日、診断病日、解熱病日、入院の有無・理由

検査：使用した検査法、スマートジーンにおけるサイクル数（菌量の指標）およびマクロライド耐性遺伝子の変異の有無、Spotfire における Cp 値（菌量の指標）

治療：初回治療薬、追加治療薬

主要解析項目：診断方法（①スマートジーンを使用した症例と②Spotfire および③LAMP を使用した症例）と、診断から解熱までの日数の関連を解析する。

副解析項目：総発熱期間、初診から解熱までの日数、治療薬の選択、入院率について比較検討する。

【検討会での意見】Xp 所見や採血データ（LDH、白血球数、CRP 値）もあるほうがよいという意見をいただいたが、Xp 撮影や LDH を測定した症例はないため、白血球数、CRP 値も追加で収集することとした。

「小児科クリニックにおける患者体験（PX）指標の開発」

武上 雅紗世

海外版小児外来用 PX 尺度である Child-ZAP を参考に、日本の診療文化・制度に即した日本語版 Child-ZAP(小児外来 PX 尺度)を開発し、その信頼性・妥当性を検証すべく、調査方法についてご相談させていただきました。今回は、尺度の開発と妥当性の検証をテーマにし、翻訳方法については、日本語版の基礎となるドイツ語版・インドネシア語版からの翻訳が可能となるよう試みつつ、現実的に可能な範囲もあると思われるため、英語版の利用も視野に検討すべきとご意見をいただきました。調査対象はまずはクリニック受診者を対象とすることとし、将来的には他一般クリニックにも導入できるよう、効果検証も次回以降計画してまいりたいと思います。

頂戴したご意見を基に、調査設計や仮説について再度検討してまいります。

「ポストコロナ期の小児科外来の感染対策」

中村豊

COVID-19 のパンデミックの期間中、小児科外来は厳重な感染対策をとらねばなりませんでしたが、マスク、フェイスシールド、ガウン、手袋などの着用が迫られ、発熱外来の設置などクリニックの診療体制も変更を余儀なくされました。あれから 5 年以上が経過して、オミクロン株の流行に変わったのち、感染者数は増加したものの重症度は低下し流行の山も小さくなってきています。このような状況下での外来診療での感染対策はどうあるべきかを考えたいと思います。患者から職員、他の来院者への感染防御はどのようにされているのか、過去の感染対策を振り返り、現時点で有益なこと、無駄なことを考えることが必要です。このために学会員へのアンケートを実施したいと考えます。この度の調査研究方法検討会では、たたき台となるアンケート案を提出し、参加者からコメントをいただきました。コメントを考慮し内容を見直したうえで、成案を得たいと考えています。

連絡先：〒820-0040 福岡県飯塚市吉原町 537 いいづかこども診療所 牟田広実

FAX: 0948-80-5632, E-mail: qze05346@nifty.com